

後まで「斑点」という世界を切り放さなかった彼の悲劇を物語っている。

それでは「斑点」に象徴されている境界は何を意味しているのか。それは人智学で言われている、アーリマンが支配する幻影、妄想の世界であると考えられる。このことはドッドキンの幻覚に登場するシンナルフネの言葉からも説明できる。

「頭脳の戯れ」に陥り、自分たちの現実

の本質、ペールイの言う「超越的实在」を悟ることができず、しかもその「頭脳の戯れ」という「仮面」の下に侵入してくる悪魔的力の虜になっている主人公たちの運命が幻想的空間で語られている。そのような空間の描写には人智学の世界観とソロヴィヨフの汎モンゴル主義的終末論が潜んでいる。

清水三三，ロシア留学時代の論文

檜 山 真 一

ハルビン学院，北満学院等で学んだ日本人，朝鮮人，モンゴル人，ロシア人にとって，清水三三（1880—1956）というのは懐かしい響を持った名前であり，伝説的な人物である。伝説的というのはその人柄とロシア語の達人であったという2点においてである。一方，我々には，彼の名前は二葉亭四迷晩年のペテルブルグ滞在と結びついて想いおこされる。しかし，清水三三が教育者として活動した場所が外地であったこと，学問的著作が残されなかったこと等から，彼の名望は限られた範囲にとどまってきた。

清水三三のことは，後藤春吉編『師弟愛は民族を越えて——清水三三——その人と随筆』（1984），清水巖編著『清水の流れ——亡父33回忌，亡母23回忌を記念して』（1987）に詳しい。この2書には，数少い清水三三の遺稿——11編の随筆と回想——が収録されている。従来まったく知られていなかったのであるが，この11編以外に活字になった，それもロシアの教育雑誌に掲載された

小論文がある。本稿ではそのロシア語論文の意義について報告する。

清水三三がロシア語を学ぼうとした動機は不明である。はじめ彼は陸軍参謀本部の委託生として札幌露清語学校で，ついでやはりおなじ資格で東京外国語学校で学んだ。同校卒業後，1年間，参謀本部に勤務。日露戦争中，第1軍司令部付陸軍通訳官として従軍。1906年2月，清水は陸軍参謀本部から2通の電報辞令を受け取っている。1通には「御用有之露国に差遣さる」とあり，もう1通には陸軍参謀総長大山巖の次の3つの訓示が書かれていた。

- 1 露国留学中は一意専心露西亜語の研究に従事す可し
- 1 留学期間は往復日数を除き満3ケ年とする
- 1 一身の進退に関しては在露国公使館付武官の指揮に従う可し

帰国後は，陸軍大学のロシア語教官として迎えられるとのことであった。結局，3年

の留学期間は倍の6年になった。3年では勉学期間は短いという在露国公使館付武官萩野末吉大佐のすすめである。ふえた3年の学費は満鉄が支給した。1906年9月、清水三三はペテルブルグ大学法科に入学。以後6年間の留学期間に、トゥガン＝バラノフスキイの経済学の講義に出席したこと以外、彼が大学でどんな講義を聴き、どのように学んだのかはまったく分っていない。

6年間の留学経験の持つ意味は、①ロシア語の体得、②ロシアの風俗・習慣を実地見聞し、ロシア人の行儀作法を身につけ、ロシア人の思考方法を識ったことである。これらがその後の清水のロシア人を相手にした社会的活動に威力を発揮し、彼に名声をもたらしたと言える。

清水三三が留学中にロシア語で書いた小論文のテーマは「日本の家庭教育」といい、1911年の「ルースカヤ・シコーラ」誌に掲載された。同誌は、当初、月刊の学校と家庭向けの一般教育雑誌として、その後、国民教育にたずさわる教師と活動家向けの一般教育雑誌としてペテルブルグで1890年1月から1917年12月まで、教育者で歴史家のヤーコフ・グレーヴィチと教育者で作家のヤーコフ・ヤーコヴレヴィチ・グレーヴィチ父子によって刊行された。「ルースカヤ・シコーラ」誌は進歩的傾向を持った雑誌で、教育者の間で人気を博した。常設欄として、教育機関に関する政令、教育および養育の歴史、養育および教育の理論と実践、批評欄と文献欄などがあった。執筆者は、イリヤー・メーチニコフ、ボドゥアン・ド・クルトネ、エヌ・チェーホフ、クループスカヤ、アー・メジエルといった著名な教育者、作家、ジャーナリスト、進歩的社会活動家であった。

さて、清水三三のロシア語論文「日本の家庭教育」であるが、「ルースカヤ・シコ

ーラ」誌の編集者ヤーコフ・ヤーコヴレヴィチ・グレーヴィチの「本論稿は、「ルースカヤ・シコーラ」誌に掲載のため日本人筆者（サンゾー・シミズ）がロシア語で叙述したものである」という註を付して発表された。内容はⅠ．（日本における結婚）、Ⅱ．子供の家庭での養育と教育、Ⅲ．むすび、という構成になっている。「むすび」で清水は、「日本の家庭教育が完璧になったということはできない。学校教育が非常に発達した今日、家庭教育はもはやとりのこされてしまった。（中略）家庭教育の主たる目的は、日本人に勇氣、信服、義侠心、そしていづこにおいても第1位を占める意欲を吹き込み育成することである。それらの中で、いづこにおいても第1位を占める意欲という特質が力強く育成されることが家庭教育の第1の目的である」と述べて論文を締めくくっている。ここには明治人の息吹きが強く感じられる。勇氣、義侠心、いづこにおいても第1位を占める意欲などという言葉を読むと、清水三三が歩んだ生涯にはこれらの言葉そのままを示すエピソードにたびたび出会う。

次にこの論文のロシア語についてであるが、私は清水のロシア語論文を読んでいて、いつしかロシア人が書いた文章だという錯覚に幾度か陥った。実際、ロシア人に清水の論文を読んでもらうと、「この論文が書かれているロシア語はまったく文法上の誤りはなく、^{リチエラトウールスイ}標準的である」（プーシキン名称ロシア語研究所研究員ゲオルギイ・フルースロフ氏）、「この論文が日本人の筆者によって書かれていることをあらかじめ知らなかったなら、東洋の風俗習慣を研究している若いロシア人の学者が書いたものと私は思ったことでしょう。論文の筆者はロシア語を自由に使いこなせるという印象を私は受けました」（京都産業大学講師ア

ンナ・ミハイロヴナ・ジャマー氏) といった返事が返って来た。

最後にこのロシア語論文の意義について述べておこう。(1)日露戦争を境にして、日本にたいするロシア人の関心がかつてない程高まっていた時期のもので、教育分野もその例外ではなく、日本人自身が書き、ロシア人に「日本の家庭教育」を知らしめたこと、(2)いままでに明らかになっていた清

水の一番古い著作(「学院生みの親」(1936年) から一挙に25年もさかのぼること、(3)清水の著作の中で現存する唯一のロシア語論文であること、(4)ロシア留学の成果の一端がうかがえること、(5)「北満露語界の王者」と言われロシア語の達人と目された時期はこの論文執筆の少し後になるが、それを間接的にも示す客観的な証拠であること、などである。